

女性ヘルスケア委員会企画

1) PIH 既往は将来の生活習慣病発症のリスク因子である

新潟市民病院 患者総合支援センター (スワンプラザ) 倉 林 工

妊娠は、一時的に女性の循環動態や代謝機構を劇的に変化させ大きな負荷をもたらす。母体にとって周産期は自らの生涯の健康を予測するチャレンジテストの時期でもある。妊娠高血圧症候群(PIH)などの周産期異常を認めた母体は、将来の心血管系異常のハイリスク女性といわれる。PIHなど周産期異常の既往がわかれば、若い時期からの生活習慣病や心血管系疾患予防のための栄養・運動などの生活指導や薬物療法等の介入が可能となる。

近年、欧米を中心に、PIHの重症型である妊娠高血圧腎症発症と分娩時期による母体の長期予後の検討で、妊娠高血圧腎症で早期早産となった症例の長期生存率が不良であり、心血管系疾患による死亡率が高いことが報告されてきた。PIH既往女性の長期的な心血管系疾患リスクに関する海外のmeta-analysisによれば、妊娠高血圧腎症の女性の10~15年後の相対危険率は、高血圧が3.70[95%CI: 2.70-5.05]、虚血性心疾患が2.16[1.86-2.52]、脳梗塞が1.81[1.45-2.27]、静脈血栓症が1.79[1.37-2.33]である(Bellamy L, BMJ 2007)。

生活習慣病は生活環境、遺伝要因等の影響が大きいため、日本人の疫学データを集積・解析し対策をたてる必要がある。女性の生活習慣と健康に関する疫学調査(日本ナースヘルス研究(JNHS))のベースラインデータから45歳以上の経産婦10,456人を対象とした解析では、①母親にPIH既往があるとその娘のPIH発症の年齢補正odds ratio(OR)は約2.7倍であること、②PIH既往は本人の将来の高血圧(OR[95%CI]: 2.59[2.20-3.05])と、高コレステロール血症(OR: 1.42[1.22-1.66])発症のリスク因子となることが判明した(Kurabayashi T, Maturitas 2013)。また、母子手帳

を用いたPIH既往と生活習慣病の薬物療法の有無の解析では、40歳以上のPIH既往女性は高血圧治療(OR: 4.28[2.14-8.57])と脂質異常症治療(OR: 3.20[1.42-7.22])が有意に高率であった(Watanabe K, Menopause 2015)。エンドポイントとしての心血管系疾患の発症は長期的な観察が必要のため、これらの日本からの報告では心血管系疾患の発症について解析できていない。しかし、日本でもPIH既往は将来の生活習慣病発症のリスク因子であることは間違いない。

今後の対策として以下の項目があげられる。(1)医師(産婦人科、内科など)、助産師、看護師、保健師などの医療スタッフに対して、PIHの既往自体が将来の生活習慣病や心血管系疾患の独立した危険因子であることを啓蒙する。(2)多くのPIH症例では産褥1か月検診で症状が軽快しており、長期フォローからの脱落が多いという現実がある。PIH既往女性の長期的フォローに関して、病診連携を基本とした地域医療の観点からも、「女性医学」や関連する学会、産婦人科医会や医師会、行政等と協力した体制の確立が急務である。(3)妊婦や若い女性に対し、妊婦指導や分娩後の退院指導時あるいは学校教育の場等で、PIH既往は本人の生涯の健康のみでなく子孫の健康におけるリスク因子でもあることを正確に伝える体制をつくる。母子手帳の母体に関する記載事項の充実も必要であろう。

PIH既往は将来の生活習慣病発症のリスク因子であり、その適切な管理は女性の生涯のヘルスケアを目標とする「女性医学」での重要な関連領域のひとつである。PIH既往女性の長期的なフォローの重要性を認識し、Office Gynecologyを中心とした速やかな管理体制の確立が望まれる。